

皮革製サンダル考

—エジプト・アコリス遺跡出土のサンダルを例として—

花坂 哲

Egyptian Leather Footwear: Studies of the Akoris Specimens

Tetsu HANASAKA

古代エジプトにおける履物は、裕福な支配階級の人々が祭祀などの儀礼的場面、または副葬品として使用したとされ、「古代エジプト人は裸足で生活していた」というのが通説となっている。しかし、アコリス遺跡から出土した末期王朝時代の皮革製履物を検討した結果、使用痕跡があり、壊れた箇所を補修を行っている点から、実用品であったと考えられる。古代エジプトの社会や生活の復元は支配階級を基準として進められてきたが、履物研究は一般民衆の生活復元の新たな視点となりうるものである。また、履物の型式学的変遷を追い、編年案を提示した。これは、出土地や年代が不明のために活用できなかった資料に光を当てる手掛かりとなるものである。

キーワード：エジプト末期王朝時代、アコリス、皮革製履物、耳付きサンダル、皮革工房

It is generally believed that 'ancient Egyptians were barefoot in daily life'. Only the ruling class, such as the king and high officials could use footwear, and usually they were worn for ceremonies or as tomb furnishings. However, results of an examination the leather footwear dated to the Late Period found at Akoris, in Middle Egypt, it is proposed that footwear was of practical use because traces of actual use were identified, in addition to evidence of repair work on damaged parts. Therefore, a study of footwear is a viable research area in the reconstruction of daily life for the common people of ancient Egypt, knowledge of whom has been limited since most research has been based on the life of the ruling class. Furthermore, chronological and typological changes in footwear have been found which holds great significance for ascertaining the date and location of leather footwear from unknown contexts.

Key-words: Late Period Egypt, Akoris, leather footwear, ear-sandal, leather workshop

はじめに—研究の現状と研究目的—

古代エジプトの王朝時代¹⁾を通じて、皮革製品製作²⁾や製革・鞣製作業³⁾場面が墓のレリーフや壁画などに描かれている (Lepsius 1848: pl. 49; Newberry 1893: pl. 4, 11; Petrie 1898: pl. 21; Davies 1902: pl. 25 など)⁴⁾。例えば、ルクソール西岸「貴族の墓」にある、第18王朝の高官レクミラ (Rekhmira) 墓の壁画では、計17人の工人がサンダルなどの製品製作、製革・鞣製作業を行っており、使用工具や作業工程が推測できる有益な資料となっている (Davies 1973: pl. 52-54) (図1)。こうした図像資料を用いた研究が盛んである一方で、実際の出土皮革製品を扱った研究は少ない。皮革製品や皮革技術に関して、J. W. ウォタラー (Waterer) や A. ルーカス (Lucas)、R. J. フォーブス (Forbes) などが古代技術論全般の1つとして触れており (Waterer 1956: 147-190; Lucas 1999 [1962]: 33-37; Forbes 1966: 1-79)、近年では、古代ローマの履物を中心

とした皮革技術研究を行っている C. van ドリル=マリー (Driël-Murray) が古代エジプトの皮革製品や製革・鞣製方法について記している (Driël-Murray 2000)。乾燥した気候のため、他地域と比べると遺物の保存状態が良く、王朝時代を通じて皮革製品の使用が認められるにもかかわらず、それでもなお、注目度の低い研究分野と言えよう。

とりわけ、古代エジプトにおける皮革製履物⁵⁾に関しては、生活史や服飾史研究の中で、その利用をわずかに言及しているだけであり、「古代エジプト人は裸足で生活していた」というのが通説となっている (Montet 1981: 72-73; Strouhal 1997: 81-82; Brier 1999: 129-130 など)。履物を扱った研究として、ドリル・マリーは前出書の中で履物の項を設け、先王朝時代から新王国時代、ローマ期の出土遺物と図像資料を用いて、履物の出土状況や形状の特徴、図像資料中での描かれ方などを各時代ごとに概観している。履物以外の皮革製品も含めて、彩色方法と装飾方法をまとめ

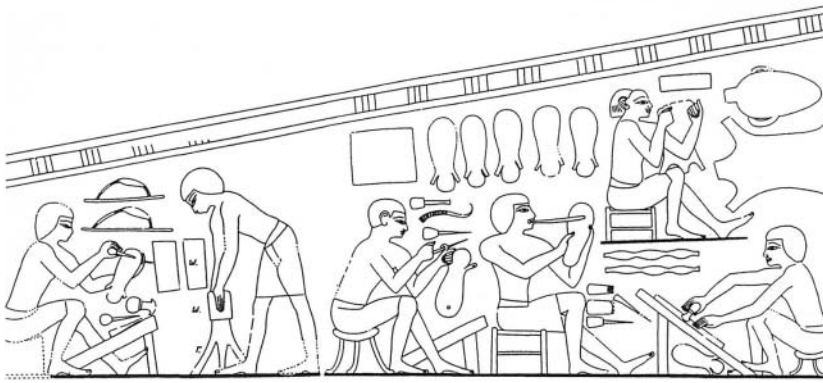


図1 サンダル製作場面壁画 (レクミラ墓: TT100)

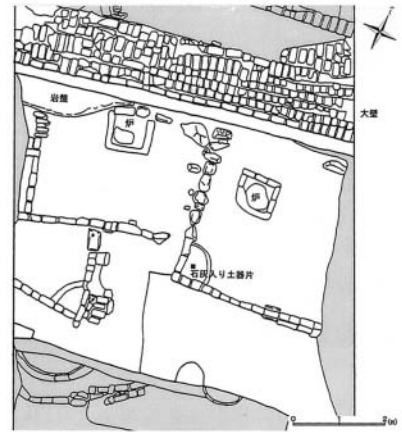


図2 アコリス遺跡皮革工房址平面プラン (2003年度調査終了時点)

ているが、比較的資料数の多い新王国時代を中心とした記述にとどまっている (Driel-Murray 2000)。また、フランス・ルーブル美術館所蔵の古代エジプト履物のカタログでは、縫合技術や装飾方法を考察し、さらに型式分類を試みている。しかし、扱っている資料は、疑問符付きではあるが「ローマ期」の履物がほとんどであり、王朝時代の皮革製履物に関してはほとんど触られていない (Montembault 2000)。これまでの研究は、資料数が多く、形状の変化が著しい新王国時代とローマ期を中心としたものであったと言えよう。その他に、90点余りの皮革製履物をカラー写真で確認できる、イギリス・ピートリー博物館のオンラインカタログがあり⁶⁾、世界各地の博物館の収蔵も少なくないが、しかし、出土遺跡不明の遺物が多く、それが判明している場合でも発掘調査年代が古いために情報が少ない。こうしたことが、上述した通説に加え、履物の詳細研究の進展を阻んでいる要因となっているのである。

本稿では、アコリス遺跡 (Akoris) の2002年から2004年までの発掘調査で、末期王朝時代の「皮革工房址」⁷⁾から出土した皮革製履物を取り上げ、その製作技術の一端を明らかにしたい。アコリス遺跡からは、本来の形状を推量できる皮革製履物が40点ほど、さらに、履物の一部分やヒモや裁断片、その他の製品を含めると数百点の皮革製品 (片) を数え、これほどの数の皮革製品が出土している遺跡は稀有である。また、図像資料に描かれた履物や素材の異なる履物、さらに古代ギリシア、ローマなどの東地中海世界の履物も参考にしながら、古代エジプトの皮革製履物の編年試案を提示したい。出土地と時代が明確であるアコリス遺跡出土の末期王朝時代の皮革製履物が、新王国時代とローマ期の履物を中心とした研究史の空白を埋めるものとして重要な意味を持っているからである。

アコリス遺跡「皮革工房址」(図2)

エジプトで確認されている皮革関連遺構は、先王朝時代のゲベレイン遺跡 (Gebelein) と新王国時代のアマルナ遺跡 (Amarna) の2例にとどまる。前者は、植物物質で鞣したヤギ皮革片や、鞣し剤に使用したというアカシアの莢や葉が出土しており、最古の「鞣し工房」と紹介されることが多い (Lucas 1999: 34 など)。これに対しドリル・マリーは、遺構の年代がはっきりとしないうえに、複雑な作業工程を要する植物タンニン鞣しを先王朝時代に行っていたという見解には否定的な立場であり、アカシアの莢や葉が出土するだけで「鞣し工房」と判断することを疑問視している (Driel-Murray 2000: 305-306)。また、後者のアマルナ遺跡では、家屋から製作途中のサンダルや原料皮革、裁断片が出土しているが⁸⁾、残念ながらその詳細は報告されていない (Peet and Woolley 1923: 32-33)。

アコリス遺跡の「皮革工房址」は、2004年度の調査終了時点で南北6.5m × 東西14mの範囲が確認されており⁹⁾、数段の日乾レンガ壁や不整形の石灰岩などで、いくつかの区画に分けられている。「皮革工房址」の詳細に関しては、アコリス遺跡の年度概報と拙稿でまとめてあるので (Kawanishi and Tsujimura 2003, 2004; 花坂 2004)、ここでは概略だけを記すことにする。

遺構内埋土は、硬化面、灰、獣毛、植物遺存体などが数cmずつの層をなし、これらが繰り返して堆積する特徴を持っている。獣毛は黒色、茶色、黄白色をしたヤギの毛であり、植物遺存体は黒褐色の莢と種子 (マメ科アカシア属の *Acacia nilotica* (L.) DEL.の豆果。現地では「ソントの木」と呼ばれている) である。また、遺構内から脱毛に使う石灰塊や、皮革の彩色顔料にする緑青が出土し、獣毛層と植物遺存体層から履物を中心とした大量の皮革製品や皮革片が出土している。

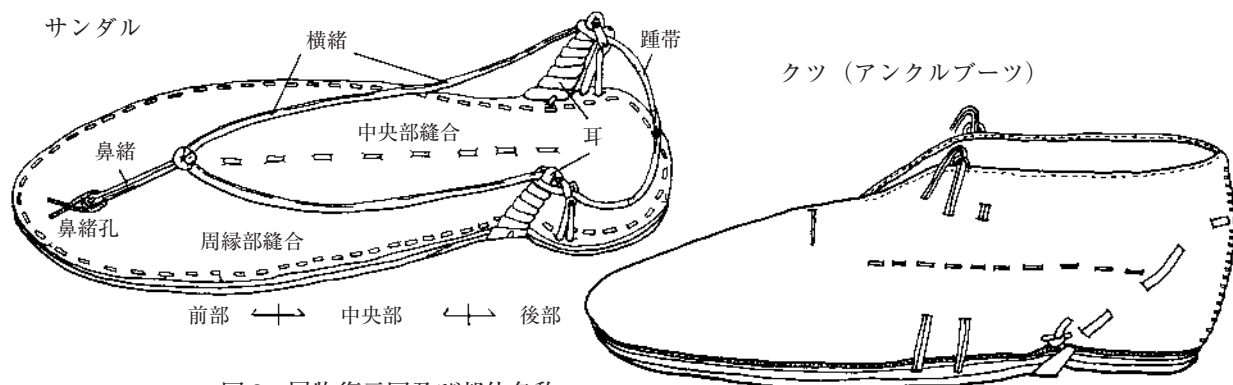


図3 履物復元図及び部位名称

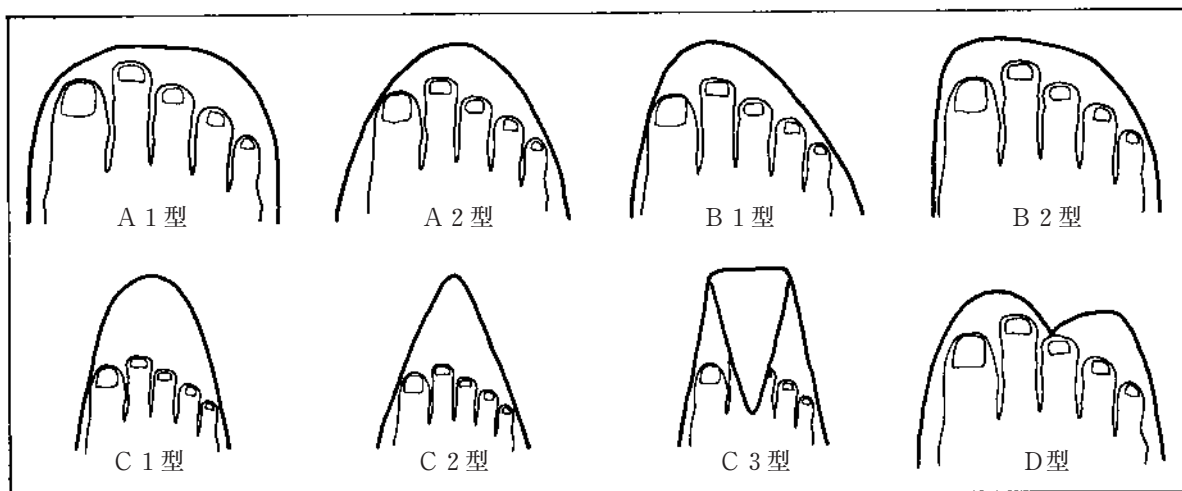


図4 ソール先端形状の分類

断定するにはいくつかの問題点を残すが¹⁰⁾、大量の皮革製品や皮革片、獣毛、鞣し剤となる植物の莢や種子が出土する点から、皮革に関する何らかの工房があったことに疑いはない。アコリス遺跡の皮革工房は、履物などの皮革製品を作る皮革製品製作工房と、生皮を鞣し、革を作る鞣製・製革工房の2つの性格を併せ持っていたと言えよう。現在のところ、この工房の精確な操業年代を判断する決定的な資料を欠いているが、遺構の堆積状況や共伴遺物、アコリス遺跡の日乾レンガと土器の編年などから、末期王朝時代終末期にあたと推測している (Kawanishi and Tsujimura 2003, 2004)¹¹⁾。

形状分類

古代エジプトのサンダルは所謂「草履」や「ビーチサンダル」、「草鞋」と呼ばれる形状であり、足の指を掛けるヒモが付く (鼻緒)。本稿で呼称するサンダルの各部位の名称については図3として示したが、若干の補足を加えておく。まず、足甲を固定する「横緒」はT字、V字、Y字形などの形状があり、「踵帯」は足首を一回りして固定する例とアキレス腱のみを固定する例がある。王朝時代の皮

革製サンダルのほとんどが「ear」または「tag」と呼んでいる「耳」を持つ。これはソールの両側端 (土踏まずと踵の中間付近) に張り出した箇所であり、「横緒」や「踵帯」を結び付けるためのものである。「耳」は古代エジプト王朝時代の皮革製サンダルの最大の特徴であり、王朝時代に続くプトレマイオス朝期の製品も、その例にもれない。

ところで、ルーブル美術館のカタログでは、皮革製履物をIからXIのクラス (Classe) に分類している。そして、それぞれのクラスをタイプ (Type) に分け、さらにタイプにヴァリエーション (Variante) を加えて細分を試みている。カタログでは、クラスIとしたサンダルを、横緒の付き方でタイプAからCに細分し、さらに、それぞれいくつかのヴァリエーションを設定している。横緒を耳に結んだサンダルをタイプA、バンド状の幅広な横緒を、切れ込みを入れたソールの間に通した例をタイプB、細いヒモ状の横緒をソールに直接縫い付けた例をタイプC、とそれぞれしている (Montembault 2000: 62-83)。しかし、タイプBとCはローマ期のサンダルであり、王朝時代のサンダルの最大の特徴である「耳付きサンダル」をタイプAヴァリエーション1に分類しているだけで、それ以上の詳

細な分類は行われていない¹²⁾。

王朝時代のサンダルの形状変遷を辿り、編年を組むうえで、K. D. モロウ (Morrow) の行った研究が参考にできよう。モロウは前700年から前31年までの古代ギリシアの彫像を取り上げ、履物のソール先端の形状を分類し、編年を行っている (Morrow 1985: 155, Fig. 1 など)。新王国時代にソール先端の形状が大きく変化することは以前から指摘されており (Driel-Murray 2000: 314-315)、本稿でもソール先端の形状に着目し、古代エジプト履物のソール先端の形状を以下のように分類して論を進める (図4)。

A型：ソールの中心線で左右対称となっている

A1型：全体に丸味を帯びるが、最先端が直線的

A2型：全体がなだらかな曲線を描く

B型：親指から小指にかけて、片流れしている

B1型：なだらかな丸味を持って曲線を描く

B2型：隅丸ではあるが、角を持つ

C型：全体が細長く、尖り、指先に余裕がある

(左右対称・片流れの双方がある)

C1型：最先端が丸味を帯びる

C2型：最先端が鋭角的に尖る

C3型：C1型、C2型の先端が反り返っている

D型：先端がハート形に分かれている

この分類に基づいて論を進めていく。

アクリス遺跡出土の皮革製履物の検討 (表1、図4、5)

アクリス遺跡の発掘調査で、皮革工房址から出土した皮革遺物は数百点にのぼる。そのほとんどがサンダル・クツからなる履物の一部であり、本稿では皮革工房址から出土した29点と工房址以外から出土した9点、合計38点を分析の対象とした。ここでは残存状態が良く、技術的特徴を観察できるものを中心に取り上げる。なお、以下で使用する番号 (No.) は表1と図5の番号に対応する。

No.1：サンダル、ソール2枚合わせ、中央・後部残存、残存長16.2cm、復元長23~25cm、残存幅9.4cm、先端部形状不明

1層目のソールを少し小さく裁断し、2層目のソールにだけ耳を切り出す。そして、ソール双方の周縁部を革ヒモで縫合している。耳に革ヒモを取り付け、また、直接ソールに別の革ヒモを結び付ける。両側に取り付けた、これら前後2本、計4本の革ヒモの先端は輪になっている。左右それぞれ1対の輪に別の1本の革ヒモを通し、横緒と踵帯を作る。1層目のソール表面は灰茶褐色だが、本来は全面に獣毛が付いていたと思われる。現在は土踏まず付近にのみ茶褐色の獣毛が残存する。また、横緒や踵帯の革ヒモは赤彩してある。

No.2：サンダル、ソール5枚合わせ、補強用帯革3枚、

前・中央部残存、残存長16.3cm、復元長21~24cm、残存幅8.6cm、先端部形状B1型、赤茶褐色

耳はわずかに痕跡を残すが、横緒、踵帯についての詳細は不明である。ソールに鼻緒孔を開け、補強のために孔の周囲を別革で縁取る。ソールは5層と非常に多層だが、残存率は低い。ソール周縁部は革ヒモで縫合し、縫い目を補強する細い帯革が2重に付く。さらにソール裏面側にも補強用の帯革を当て、裏面の帯革は赤色がうっすらと残る彩色革である。

No.3：サンダル、ソール2枚合わせ、前・中央部残存、残存長16.5cm、復元長21~23cm、残存幅8.0cm、先端部形状B1型、灰茶褐色

ソールは踵部分を欠くが、しかし、耳に結んでいたと思われる革ヒモが一部残ることから、耳が付いていたと判断できる。2層革のソールに鼻緒孔を開け、周縁部は革ヒモで縫合し、ソール中央部はタテ方向に1列の獣糸で縫合する。また、周縁部が破損したためか、周縁部を獣糸で巻きかがり縫いして、破損開口部を補修している。

No.5 (図なし)：サンダル、ソール3枚合わせ、全体残存、残存長20.2cm、残存幅7.5cm、先端部形状B1型、濃赤茶褐色

ソールは耳付きのオーソドックスな形状で、鼻緒孔の周囲を補強のために獣糸で縫い取っている。ソールは3層革で、2層目を上下層で包み込み、周縁部を獣糸で縫合する。サンダルが鼻緒付近と耳付近の2ヶ所で破損したため、裏面から当て革をして破損部分を補修している。現在はソールの親指の付け根付近で新たに切れ、耳付近の当て革を失っている。また、踵部後方のソール両端にヒモを結び付けた痕跡があり、これは横緒と踵帯を繋ぐヒモと推測できる。

No.9：サンダル、ソール2枚合わせ、全体残存、残存長16.8cm、残存幅7.4cm、先端部形状B1型、灰茶褐色 (ソール裏面)

耳はなく、2本の革ヒモが直接ソールに結び付く。そのヒモの先端に孔を開け、そこに別の革ヒモを通して結び、横緒と踵帯を作る。薄い黄白色と赤茶色の獣毛が残る皮革をソール1層目に使用している。鼻緒孔はソールに切れ目を入れ、そこに両端に結び目がある鼻緒を付ける。鼻緒等のヒモは、赤色の皮革シートを折りたたんで作っている。ソール周縁部は革ヒモで縫合する。No.5同様に、歩行時に折れ曲がる箇所が裂けたため、ソールの裏面から別のサンダルパーツを当て、獣糸で縫合し補修した痕跡がある。さらに、その裂け目部分に1層目と同色の獣毛を詰め込み、見栄え上の違和感をなくしている。使用の痕跡があって、補修を行っているにも関わらず、足の裏が接する1層目の獣毛はNo.1とは異なり擦

り切れていない。

No.23 (図なし) : サンダル、ソール3枚合わせ、補強用帯革1枚、全体残存、残存長22.1cm、残存幅8.3cm、先端部形状A2型、濃茶褐色

全体がニカワ化して脆く、遺存状態は良くない。ソールは耳付きで、2つ並んだ鼻緒孔と鼻緒の一部が残存する。3層革のソール周縁部は狭間隔で、革ヒモで縫合し、その革ヒモの下に細い革を挟んでいる。この細い革は破損したソールの上層が残ったものではなく、縫い目部分を補強するための帯革だろう。また、ソール中央部も獣糸でタテ方向に5列の縫合をする。ソールの3層革のうち2層目は側面からは見えず、少し小さい2層目を1層目と3層目の間に挟む。

No.38 : ?、ソール3枚合わせ、補強用帯革1枚、中央部残存、残存長11.0cm、復元長20~25cm、残存幅7.6cm、先端部形状不明、灰茶褐色

耳は3層目に付くが、横緒・踵帯・鼻緒等の詳細については不明である。ソールの2層目を挟み込むように、1層目と3層目の周縁部を狭間隔で革ヒモによって縫合し、さらに補強用の細い帯革が付く。また、裏面から別のサンダル片3点を当てて、補修している。

No.19 : クツ (サンダル)、ソール3枚合わせ、アッパー1枚、ほぼ全体残存、残存長さ22.3cm、復元長23~24cm、残存幅9.9cm、先端部形状A2型、茶褐色

3層ソールのすべてに耳を付け、2つ並んだ鼻緒孔を開ける。ヒモの残存率は低いが、周縁部を革ヒモで、ソールの全面を獣糸で縫合している。アッパーは周縁部でソールと併せて縫合する。また、アッパーの踵部側面付近に革ヒモを通し、補強している。アッパー部分が明確に残存する「アンクルブーツ」状のクツだが、その一方で鼻緒孔が開き、孔の周囲に補強用の帯革を当てた痕跡がある。この点から、元来はサンダルとして作り、その後クツに作り変えたと推測できる。

No.20 : クツ、ソール2枚合わせ、アッパー1枚、全体残存、残存長23.8cm、推定長24cm、残存幅8.9cm、先端部形状B1型、暗茶褐色

2層ソールの両方に耳が付く。周縁部でソールとアッパーを革ヒモで縫合し、補強用の帯革が付く。U字またはV字状に革を切り取ってアッパーを作っているが、踵部分は残存しない。ソール中央部の縁に左右2対、計4本の革ヒモを結び付け、耳から伸びた革ヒモとともにアッパーの側面部を補強する。さらに別の革ヒモがアッパー側面部をソールと平行して貫いている。アッパーは10cm程の高さがあり、くるぶし辺りまで届く「アンクルブーツ」のクツである。底面が非常に磨耗しており、履き込まれた印象を受ける。

No.21 : クツ、ソール3枚合わせ、アッパー1枚、ほぼ全体残存、残存長21.5cm、復元長23~24cm、残存幅8.7cm、先端部形状A2型?、濃赤茶褐色

耳付きのソールにアッパーが付く。ソールとアッパーを併せて革ヒモで縫合し、細い帯革を補強用に付け、ソール全面も獣糸で縫合する。アッパーをU字またはV字状に切り取り、踵の後ろで1cm程の重なりを付けて獣糸で縫合する。現在、アッパーは3重に折れ曲がっているため、No.20のような側面部の補強ヒモの有無などは確認できないが、耳から伸びる革ヒモが踵部分に回り補強している。高さ8cm程の「アンクルブーツ」状のクツである。

No.22 (図なし) : クツ、ソール2枚革+毛織物1枚、アッパー2枚合わせ、前・中央部残存、ソール残存長17.2cm、アッパー残存長8.0cm、残存幅12.3cm、先端部形状A2型、灰茶褐色

「スリッパ」の唯一の出土例。ソールは2層革で、上下の革層の間に厚みのある毛織物を挟み込む。周縁部を革ヒモで縫合し、ソール中央部にヨコ方向1列の革ヒモを通す。また、アッパー部分との境界でソールを前後2つのパーツに分け、両者を獣糸で縫合して繋ぐ。2層革のアッパーは端部を革ヒモで縫合し、縫い代部分を内側に折り込み、ソールも含めた4層をまとめて、さらに縫合する。アッパー部分はソールに較べて大きく、ゆったりとしている。遺存状態が良くないために詳細は不明だが、彩色や装飾はないと思われる。

No.25 (図なし) : クツ、ソール2枚合わせ、全体残存、残存長14.3cm、残存幅5.5cm、先端部形状A2型、灰茶褐色

耳も鼻緒孔もない小さな製品。2層革ソールの周縁部は革ヒモで狭間隔に縫合し、その革ヒモの下にソール上層またはアッパー部分の断片がある。製作の途中とも考えられるが、ソール裏面の革ヒモが磨耗し、つぶれている。このことから実際に使用した、アッパー構造を持つ「スリッポン」状のクツと推測できる。

王朝時代のサンダルの最大の特徴として「耳」が付くことは上述したが、今回資料として用いた19点のサンダルのうち9点は前部または中央部しか残存せず、耳の有無は不明である。残り10点のうち、耳付きが7点で、残り3点は耳が付いていないと判断した。しかし、No.1、5、38の資料から確認できるように、ソールの各層に耳が付くのではなく、最下層にとどまる場合がある。このため、耳が付かない3点についても、最下層のソールが失われた状態とも考えられよう。また、8点のクツのうち3点が耳を持つ。

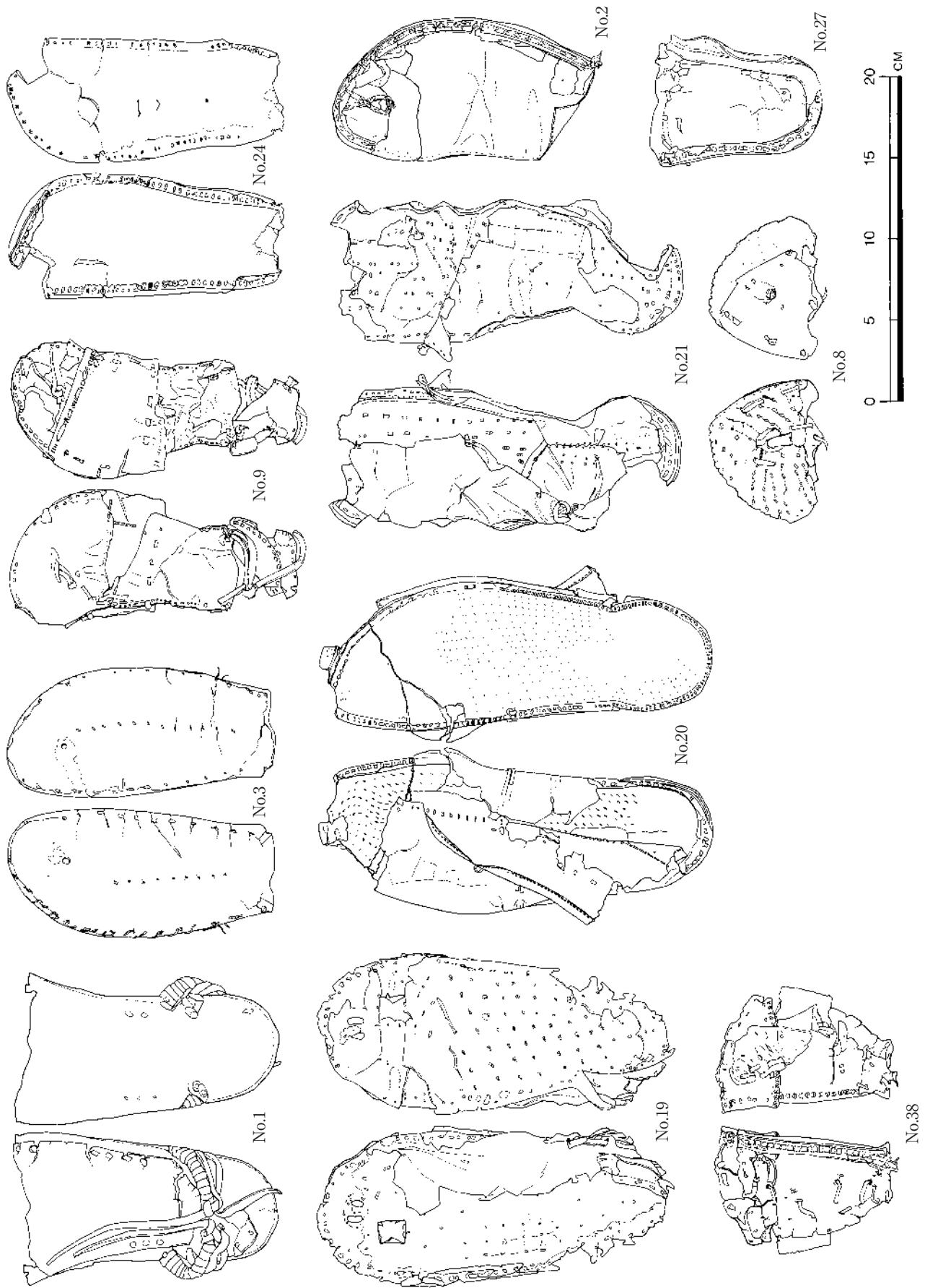


図5 アコリス遺跡出土皮革製履物図
(No.2, 27を除き、左側が表面)

表1 アコリス遺跡出土皮革製履物一覧

No.	種	部位	枚数	長さ	推定	幅	耳	鼻緒孔	周縁部縫合	縫合間隔	補強帯革	中央部縫合	先端	出土区
1	サンダル	中央・後部	2枚	16.2cm	23-25	9.4cm	有	?	革	広い	なし	なし	?	工房
2	サンダル	前・中央部	5枚	16.3cm	21-24	8.6cm	有	?	革	広い	なし	なし	B1	工房
3	サンダル	前・中央部	2枚	16.6cm	21-23	8.0cm	?	有	革	広い	なし	獣糸	B1	工房
4	サンダル	中央部	3枚	12.6cm	?	6.8cm	有	?	革	広い	なし	なし	?	工房
5	サンダル	全部	3枚	20.2cm	20	7.5cm	有	有	獣糸	広い	なし	なし	B1	工房
6	サンダル	前部	1枚	12.5cm	?	9.7cm	?	有	?	?	?	?	B1	工房
7	サンダル	中央部	1枚	22.8cm	25-27	8.1cm	有	?	?	広い	なし	革	?	工房
8	サンダル	前部	2枚	07.2cm	?	8.6cm	?	有	?	広い	なし	獣糸	B1	工房
9	サンダル	全部	2枚	16.8cm	16	7.4cm	なし	有	革	広い	なし	なし	B1	工房
10	サンダル	前部	1枚	14.0cm	?	7.4cm	?	有	?	?	?	なし	B1	外
11	サンダル	前・中央部	2枚	15.0cm	?	8.0cm	?	有	獣糸	広い	なし	なし	B1	外
12	サンダル	前部	2枚	10.0cm	?	7.0cm	?	有	革	広い	なし	獣糸	A1	外
13	サンダル	前部	2枚	14.0cm	?	8.0cm	?	有	革	広い	なし	なし	B1	外
14	サンダル	全部	3枚	22.1cm	22	8.3cm	有	有	革	狭い	有	獣糸	A2	工房
15	サンダル?	ほぼ全部	1枚	17.5cm	20-22	7.2cm	なし	有	革	狭い	?	なし	B1	工房
16	サンダル?	全部	2枚	20.1cm	20	6.3cm	なし	有	革	狭い	有	なし	B1	工房
17	サンダル?	前部	3枚	10.0cm	?	8.0cm	?	有	革	狭い	?	革	A2	工房
18	サンダル?	前部	3枚	09.0cm	?	6.0cm	?	有	革	狭い	有	獣糸	A2	外
19	クツ・サンダル	ほぼ全部	3枚	22.3cm	23-24	9.9cm	有	有	革	広い	?	獣糸	A2	外
20	クツ	全部	2枚	23.8cm	24	8.9cm	有	なし	革	狭い	有	獣糸	B1	外
21	クツ	ほぼ全部	3枚	21.5cm	23-24	8.7cm	有	なし	革	広い	有	獣糸	A2	外
22	クツ	前部	2枚	17.2cm	?	12.3cm	?	なし	革	広い	なし	革	A2	外
23	クツ?	前部	2枚	10.1cm	?	9.3cm	?	なし	革	狭い	有	なし	B1	工房
24	クツ?	ほぼ全部	3枚	17.2cm	18-19	7.6cm	なし	なし	革	狭い	有	なし	B2	工房
25	クツ?	全部	2枚	14.3cm	14	5.5cm	なし	なし	革	狭い	なし	なし	A2	工房
26	クツ?	前部	1枚	08.6cm	?	9.3cm	?	なし	革	広い	なし	なし	B1	工房
27	クツ?	後部	3枚	10.6cm	?	7.7cm	なし	?	革	狭い	なし	革	?	工房
28	?	中央部	2枚	11.4cm	?	9.8cm	?	?	革	狭い	なし	獣糸	?	工房
29	?	中央部	2枚	17.8cm	?	9.5cm	?	?	革	狭い	有	革	?	工房
30	?	中央部	4枚	10.6cm	?	8.5cm	?	?	革	狭い	?	獣糸	?	工房
31	?	後部	3枚	10.9cm	?	6.0cm	なし	?	革	狭い	有	なし	?	工房
32	?	中央部	2枚	12.5cm	?	8.0cm	?	?	革	狭い	有	獣糸	?	工房
33	?	後部	3枚	08.0cm	?	4.5cm	なし	?	革	広い	なし	なし	?	工房
34	?	後部	2枚	04.6cm	?	6.7cm	?	?	革	広い	有	なし	?	工房
35	?	中央部	3枚	08.6cm	?	7.1cm	有	?	革	狭い	有	獣糸	?	工房
36	?	中央部	4枚	14.3cm	?	8.6cm	なし	?	革	狭い	有	革	?	工房
37	?	中央部	2枚	11.9cm	?	6.8cm	?	?	革	狭い	なし	なし	?	工房
38	?	中央部	3枚	11.0cm	20-25	7.6cm	有	?	革	狭い	有	革	?	工房

ソール先端の形状が判別できる資料では、親指から小指にかけて「片流れ」し、なだらかな丸味を持ったB1型が23点中14点と最も多くなっている。続いて左右対称で、全体がなだらかな曲線を描いたA2型が多いが、しかし、新王国時代から第3中間期に流行した、全体が細長く、尖ったC型のサンダルは出土していない。

ところで、ソールの縫合に関して、技術的な特徴をいくつか指摘できる。まず、ソールが複数層である場合、中間層は上下層よりも一回り小さく作り、上下の革層で包み込むように縫合している。アコリス遺跡では植物タンニン鞣しを行ったと推測できるが、薄く強い革を作り出すことは技術的に困難であったらしく、それは現代革に比べると厚みがある。複数の革を重ねてソールを作ることは、単層のサンダルと比較すると、耐久性が増し、履き心地も向上するかもしれないが、一方で複数の革で厚くなったソールは縫合作業に難が生じるだろう。そこで、ソール周縁部の縫合箇所は重なりが薄くなるように、一回り小さなソール革を中間層に用いたことが考えられる。

しかし、このことは単純に縫合技術や工具の未発達を意味するものではない。足裏が接するソール中央部の縫合の有無を、1、2層のソールと3層以上のソールで比較すると、前者は22点中9点、後者は16点中10点が中央部で

縫合しており、縫合しにくいと思われる3層以上のソールの方が高い比率である。中央部の縫合は、多層になったソールに強靱性を与えるためであろう。これらのことから、縫合作業の労力を減らし、強靱で耐久性に富んだ製品を作るために、中間層の革を一回り小さく作る、または中央部を縫合して補強するなど、縫合方法を使い分けていたと推測できる。

耳の付け根や鼻緒孔など、ソールを切り込んだ箇所を境に破損した例が多いことから、皮革を切り込むことは耐久性を失うことにつながっていると考えられよう。しかし、ソールの周縁部に事前に多くの孔を開け、そこに革ヒモを通して、縫合している資料も多い。事前に孔を開けることは耐久性を失う危険性を持つが、一方で革ヒモを通しやすく、狭く密な間隔で縫合することが可能になり、強靱性を得ることになる。また、革ヒモで周縁部を縫合した資料32点のうち、狭く密な間隔で縫合した例は19点、ある程度広い間隔で縫合した例が13点を数える。それらのうち、補強用の帯革を持つものは前者が11点、後者が4点である。つまり、狭間隔で縫合することで、ソール周縁部に直接的に掛かる負担を補うために、帯革を1枚噛ませていると言えよう。

縫合に用いる革ヒモにも特徴が見受けられる。チャリオ

ットや家具の部品を組む際や、工具の柄に刃部を固定する際に皮革ヒモやロープを用いるが、これらの多くは生皮である。これに対して、サンダルの場合は鼻緒や横緒などのヒモに鞣し革を用いている。履物のヒモには柔軟性が求められるが、細すぎでは用をなさない。そこで、シート状の革を折りたたみ、ある程度の太さと柔軟性をそなえたヒモを作り出している。

ヒモには赤く彩色した革を用いた例が多いが、サンダルのソールやクツのアップパーでは彩色革の使用は少ない。新王国時代や後のローマ期に多く見ることができるとされる華美で装飾的なサンダルと異なり、アコリス遺跡出土の履物に装飾は全くなく、極めて実用であったと推測できよう。また、ソールの底面が非常に磨耗した資料が多く、No.3、5、9、38のように壊れた別の製品片を用いて補修している例が少なくない。これらの点から実用品であったことは疑いない。

本稿で取り上げた資料は末期王朝時代終末期にあたると思われるが、末期王朝時代より前の時代で、サンダルなどの履物を身に付けることができた人物は、王や高官など富裕な支配階級の人々であった。しかも、それらのサンダルは日常生活における恒常的な使用ではなく、祭祀などの儀礼的な場面、または副葬品として使用であった。サンダルの持つ儀礼的・象徴的意味¹³⁾については別稿にゆずるが、末期王朝時代終末期のアコリス遺跡では称号を持つような支配階級が確認されておらず、また近傍にはサンダルを寄進するような大きな神殿も存在しない。さらに、出土した資料を検討する限り、底面が非常に磨耗し、壊れた箇所を補修して使うなど、実用品としての性格が濃い。

また、図像資料などでサンダルを履いた人物は男性が中心であり、女性の例は新王国時代まではほとんど見られない。だが、アコリス遺跡出土の履物の大きさは、完形資料中の最大のもので24cmであり、復元推定サイズの平均も20.6~21.9cmである。現代人の足のサイズに照らすと成人男性用としては小さく、女性用または子供用のサイズである。しかし、出土資料のサイズだけで判断し、使用者を女性や子供と断定するのは早急であろう。いつ、どこで、誰が、どのような場面で使用するのかという問題は、これらの履物が使用者の足のサイズに合わせて作るオーダーメイド製品なのか、作りおきのレディメイド製品なのか¹⁴⁾、という製品製作を行う工人集団のあり方とともに課題として残る。

履物の編年試案 (図6)

先王朝時代のバダリ遺跡 (Badari) やナカダ遺跡 (Naqada) から皮革製品が出土しているが、その中にサンダルは含まれていない。ただし、イタリア・トリノ博物館

所蔵のゲベレイン遺跡出土と伝わる先王朝時代の皮革製サンダルがある。これは王朝時代のサンダルとは形状が異なり、皮革に切れ込みを入れてネット状にし、そのネット状のヒモを足甲に掛けるサンダルである (図6-13)。こうした 'strap-work' または 'net-work' と呼ばれる製法の「ネット状サンダル」についてはレヴァント地方と関連することが指摘されている (Driell-Murray 2000: 312)。

ネット状サンダルなどの新しい形状のサンダルがローマ期に再び登場するまで、古代エジプトのサンダルは王朝時代・プトレマイオス朝期を通じて、形状は大きく変化しないことは略述したが、皮革製サンダルだけでなく、その他の素材のサンダル、図像資料に表されたサンダルなども参考にして、古代エジプトのサンダルの型式学的変遷を次に追ってみたい。

1. 初期王朝時代

初期王朝時代のサンダル出土例は知られていないが、しかし、第1王朝最初の王と目されるナルメル王 (Narmer) の奉納用化粧パレットの両面に、右手に水差し、左手に1組のサンダルを手にした従者の姿が王の背後に描かれている (Malek 2003: 30-31; 近藤 1997: 49-51)¹⁵⁾。そのサンダルは鼻緒と太い横緒をそなえ、甲の側面を覆う部位を持つ。明確な表現はされていないが、耳付きのソールと推測できるものである。

2. 古王国時代

古王国時代に入ると、第5王朝の高官墓に「サンダルの皮革を切り整える」という銘文があり (Lepsius 1848: pl. 49)、デシャシャ遺跡 (Deshasha) の第6王朝高官シェドゥ (Shedu) 墓などに、皮革製サンダル製作工人と出来上がったサンダルを描いた図像資料がある (Petrie 1898: pl. 21; Kanawati and McFarlane 1993: pl. 49)。また、サッカラ (Saqqara) の第6王朝高官メルルカ (Mereruka) 墓やカゲムニ (Kagemni) 墓では、墓の主人が耳付きサンダルを履いたレリーフがある。このサンダルは鼻緒と横緒の結び目や、耳に結んだ横緒と踵帯などの描写方法から、皮革製サンダルを表現していると推断される。また、サンダルソールの長さは足の大きさとほとんど同じであり、爪先より先の余裕がほとんどない (図6-1)。これらの図像資料を見る限り、古王国時代にはすでに耳付きサンダルが一般的であったことを物語っている。

3. 中王国時代

中王国時代の資料として (図6-4)、ピートリ博物館にカフン遺跡 (Kafun) 出土の皮革製サンダルがある (UC7497)¹⁶⁾。また、ベニ・ハサン遺跡 (Beni Hasan) の第12王朝高官アメンエムハト (Amenemhat) 墓などに皮革製サンダル製作工人とサンダルを描いた図像資料があり (Newberry 1893: pl. 11)、第12王朝センウスレト3世

(Senwosret III) 治世の文字資料の中に、カフンに住むサンダル職人が「ウシ皮かヤギ皮の原料皮を送って欲しい」と要請した内容の手紙がある (Wente 1990: 73-74)¹⁷⁾。

古王国時代、中王国時代の皮革製サンダルは、単層皮革のソールに比較的大きな耳を付け、鼻緒から伸びる横緒と踵帯を耳に結び付けている。また、ソール先端部分の形状は A1、A2 型が多い。これらの皮革をどのように加工処理したのか不明であるが、厚みがあり、生皮に近い様相であることから、植物油脂糝しなどの簡便な処理を行うにとどまっていたと思われる¹⁸⁾。中王国時代までの皮革製サンダルは、色革の使用や装飾はなく、単層ソールの簡素な作りである。

また、墓の副葬品として出土する木製サンダルも、木板のソールに切れ込みを入れ、耳を表現している。全体の形状は隅丸の長方形であり、ソール先端は A1、A2 型である。細部表現の違いがあるにせよ、「耳」を持つことから、木製サンダルは皮革製品を模して作った副葬品であったと言えよう。また、多くの木製サンダルを白色に塗装し、王朝時代の壁画に描いたサンダルも白色で塗っていることから、白色がサンダルの持つ固有の色であったと考えられる。

4. 新王国時代・第3中間期

新王国時代に入ると遺存する皮革製品の種類が増える。これには、皮革を用いた新しい武器の導入や様々な工人集団が東地中海地域から移動してきた影響が指摘されている (Driel-Murray 2000: 309; Shaw 2001: 62-64)。新王国時代の皮革製品は赤や緑の彩色や、アププリケやパッチワークなどの装飾を施したものが大半を占め、サンダルに関しても、資料数が増加し、形状のヴァリエーションが増える。依然として耳付きサンダルであるが、耳の大きさは前時代までと比べると小さく、複数層のソールを周縁部で縫合している (図 6-5)。すなわち、破損しやすい耳を小さくし、複数層のソールにすることは、実用性を考慮していると言え、ドリル・マーリが確認した新王国時代のサンダルはすべて実際に履いた形跡がある点と符号する (Driel-Murray 2000: 312)。さらに、赤や緑の色革を頻用している点で加飾度が増すとともに (図 6-6)、サンダル全体およびソール先端の形状が大きく変化している。

第 18 王朝のサンダルはツタンカーメン王墓¹⁹⁾ やデル・エル・メディーナ遺跡 (Deir el-Medina) に出土例があるが (Montembault 2000: 87-90)、アマルナ期 (Amarna Period) までのサンダルは、前時代との間に形状の大きな変化はない。アマルナ遺跡のレリーフに描かれたアクエンアテン王 (Akhenaten) のサンダルは、ソール先端が細く、足指の先に余裕がある C1、C2 型や、やや上に反り返った C3 型のサンダルを履いている。このサンダルの形状は続くラムセス朝期 (Ramesside Period、第 19、20 王朝) に

顕著となり、グロブ遺跡 (Gurob) やルクソールの出土品 (UC28350、BM EA24708) は、ソール全体が非常に細長く、大きく反り返った C3 型である (図 6-7)。これは当初は女性が履いていたが、第 22 王朝以降に男性も履くようになったとされ (Driel-Murray 2000: 315)、この形状は第 3 中間期にも継続している。

新王国時代のレリーフや壁画、彫像などに表されたサンダルは、植物製サンダルを模しており、踵帯を欠き、幅広の横緒をそなえたものが多いが、その形状の変遷は皮革製サンダルと共通点が見受けられる。前時代までのサンダルの長さが指先止まりであるのに対して、新王国時代に入ると指先に余裕を残し、細く尖った C 型のサンダルとなる。さらに、第 18 王朝アマルナ時代頃に先端が反り返った C3 型のサンダルも登場し、第 19 王朝以降は描かれるサンダルのほとんどが C3 型となる (図 6-2)。この先端は末期王朝時代でも引き継がれ、第 26 王朝の墓では先端が大きく反り返り、横緒とつながっているサンダルが描かれている (図 6-3)。皮革製サンダルにない形状として、「ポート形」植物製サンダルがある。これはソールの周縁部が立ち上がり、足甲の側面を覆う形状を呈している。

また、「クツ」は第 18 王朝に初現がある。当時のクツは、ソールに足甲を覆うアッパーを縫い付けただけの簡単な作りで、足を入れる部分を U 字状または V 字状に革を切り取っただけである。カイロ博物館や大英博物館、ルーブル美術館が所蔵している彩色皮革製クツは²⁰⁾、先端が C3 型のソールにアッパーを縫い付け、アッパーには装飾皮革片を縫い付けている。こうしたクツはヒッタイトやバビロニアなど、メソポタミア地域から導入されたと指摘されている (Montembault 2000: 204-205; Driel-Murray 2000: 316)。

ルーブル美術館所蔵のクラス VII に分類された「アンクルブーツ」状のクツ (Louvre E1310; Montembault 2000: 192-193) は、テーベ西岸のデル・エル・バハリ遺跡 (Deir el-Bahari) の第 3 中間期のアモン神官の「隠し場所」から発見されたカイロ博物館所蔵のクツ (カイロ博物館所蔵番号 No.9.1.26.7) と、「プトレマイオス朝期のクツ」と呼ばれる大英博物館所蔵の品 (BM EA4402/03) に酷似している (図 6-12)。これらはアコリス遺跡で出土したクツ (No.20) と形状に共通性を持ち、ソールに耳を付け、その耳でアッパー側面部を補強し、楕円形に切れ込みを入れただけのアッパーから成る簡素な作りである。アッパーに小さな輪が付き、その輪にヒモを通して足甲を固定するために縛ったと思われる。これらのクツは、耳付きサンダルに代表される王朝時代の伝統的な技法を取り込みながら、第 3 中間期からプトレマイオス朝期にかけて広まった、エジプト固有の形状と思われる。

さらに新王国時代にはデル・エル・メディーナ遺跡出土

の「スリッパ」状のクツが知られている。これも上記のクツと同様に、耳を持つソールをベースに、爪先部分にだけアッパーを付けたもので、アコリス遺跡でも出土している(No.22)。ローマ期には「スリッパ」の出土数が増え、アンティノエ遺跡(Antinoe)では20点以上を数える。(Montembault 2000: 118-144)。アンティノエ遺跡出土の「スリッパ」はいくつかの形状があるが、耳を持たず、土踏まずの部分が急激に細く締まっているものが多い。さらにアッパーにはアップリケや刺繍などの装飾を施し加飾性に富んでいる(図6-9)。

5. 末期王朝時代

アコリス遺跡の出土品を例に末期王朝時代のサンダルを代表させると(図5参照)、新王国時代から第3中間期にかけて流行した、ソール先端がC型のサンダルが姿を消し、ソール先端はなだらかな曲線を描くA2型や、「片流れ」し、足の形に沿ったB1、B2型となる。この時代のA型のサンダルは古王国時代・中王国時代のA型のサンダルと比べ、全体の形状が少し細身である。

末期王朝時代も「耳付きサンダル」の伝統を受け継ぐが、しかし、その縫合技術は進歩している。それは、ソール周縁部だけでなく、中央部も革ヒモや獣糸で縫合し、さらに周縁部の縫合部分を補強するために帯革を付けた例があることから伺えよう(図6-8)。新王国時代の彩色皮革を用いた、装飾を施した富裕層好みの製品とは異なり、末期王朝時代のサンダルは植物タンニンで鞣した皮革を用いて、質素ながら強固な作りとしているのである。アコリス遺跡の事例から、末期王朝時代には実用的なサンダルの使用が一般民衆にまで広がったと推測できよう。

6. プトレマイオス朝期・ローマ期

プトレマイオス朝期の皮革製サンダルの実態は明らかでないが、王朝時代のサンダルを踏襲し、形状が大きく変化するのはローマ期に入ってからであると思われる。その形状はルーブル美術館カタログの履物型式分類のクラス1のタイプBとCにあたり、ソール層の間に、バンド状の幅広い横緒をクロスして通すタイプBと(図6-10)、細いヒモ状の横緒をソール間に直接縫い込むタイプCである(図6-11)。また、ローマ期のサンダルは、踵帯を付けず、ソールや横緒の表面に線刻を施したり、直径数ミリの丸い穴を開けるなど、装飾的要素も復活する(Montembault 2000: 56-58)。ソール先端の形状は、新王国時代に流行したC型に加え、さらに新たに登場したハート形に裁断したD型がある。ヘレニズム期のギリシアにおいて、鼻緒と横緒を持つサンダルは女性像にしか表現されておらず(Morrow 1985: 90-97)、古代エジプトにおいても、細いヒモ状の横緒や細く尖ったソールの先端、装飾などを持つサンダルは、女性的なファッション要素と捉えることもでき、

使用者も女性であったと言えるかもしれない。

また、先王朝時代にあった「ネット状サンダル」がローマ期に再び登場した。これは、先王朝時代の形状が復活したのではなく、ローマ本国から持ち込まれた新しい形態である。ローマやその植民都市で‘crepidae’や‘caligae’²¹⁾と呼ばれる軍靴として一般的であり(Forbes 1966: 60-61; Goldman 2001: 114, 122-123)(図6-14)、エジプトでも、下ヌビアのカスル・イブリム遺跡(Qasr Ibrim)から前1世紀のネット状サンダルが出土している(BM EA71828)。このようなネット状サンダルは、ローマ帝国以前のギリシア世界にも存在したことが、アルカイック期(Archaic Period)の脚型花瓶(Foot Vase)の装飾から知られる。さらに、厳格様式期(Severe Period)には、旅行や行軍など、長時間の歩行の際に用いたとされる‘Krepides’²²⁾という新しい形状のネット状サンダルが登場し、このサンダルは古典期(Classical Period)やヘレニズム期(Hellenistic Period)の彫像やレリーフの人物が履いている、最も一般的な形状である(Morrow 1985)。

上記では、皮革製サンダルに加え、植物製サンダルと図像資料を用いて、各時代の型式学的変遷を追ってきた。ここで、その変遷を簡潔にまとめておく。

まずサンダルの形状(横緒の付き方)であるが、先王朝時代はネット状であり、古王国時代からプトレマイオス朝期のサンダルは耳付きとなっている。新王国時代に登場したクツも、耳付きのソールにアッパーを縫いつけただけのものであり、この「耳」が古代エジプトのサンダルの最大の特徴と言えよう。形状に大きな変化が表れるのはローマ期に入ってからであり、これらは耳を持たず、ソール間にバンド状の幅広い横緒を通したり、細いヒモ状の横緒を直接縫いこんだものとなっている。また、サンダル全体の形状も太身から細身へと変化しており、それに合わせて耳も小さくなっている。特に新王国時代のサンダルは細身となっている。

次に先端の形状は、中王国時代まではソールの中心線で左右対称となっており、先端全体が丸味を帯び、最先端が直線的なA1型、全体がなだらかな曲線を描くA2型が多い。新王国時代に入ると先端が尖り、指先に余裕を持つC型が主流となってくる。新王国時代前半の第18王朝ではC1型やC2型であるが、第19王朝以降は、先端が反り返ったC3型が顕著となり、この傾向は第3中間期にも引き継がれる。末期王朝時代はC3型が消え、現代の靴のソールに最も近い、親指から小指にかけて片流れしたB1型やA2型が多くなっている。ローマ期に入ると、再びC型が増え、さらに先端がハート形に分かれたD型が新たに登場する。

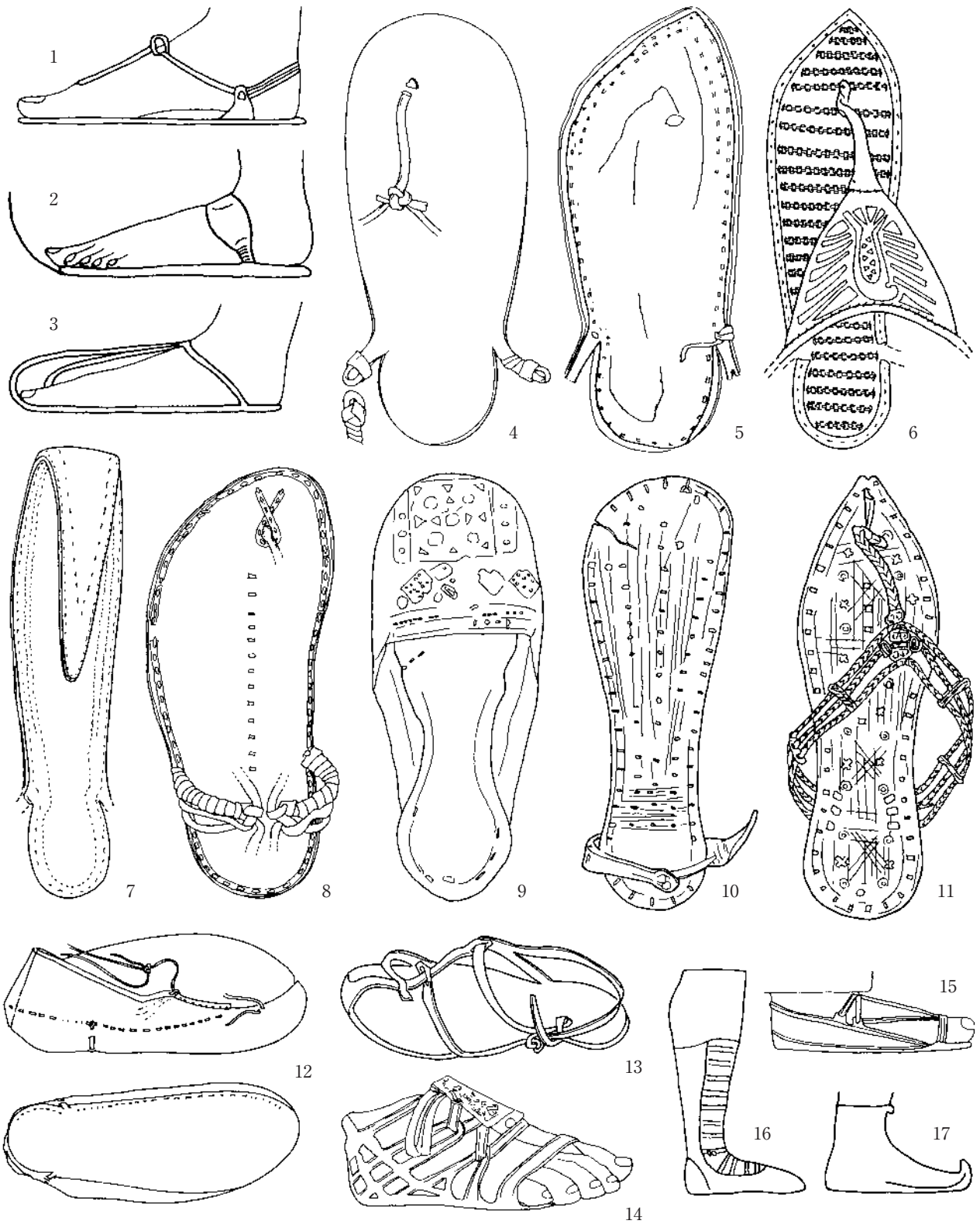


図6 各時代のサンダル例 (サイズ不問)

1 OK: 6th Dyn, 2 NK: 19th Dyn, 3 LP: 26th Dyn, 4 MK: 11th Dyn, 5 NK: 18-19th Dyn, 6 NK: 18 or 19th Dyn
 7 NK: 20th Dyn, 8 LP: サンダル模式, 9 Rome: AD 2c, 10 Rome: AD 2c, 11 Rome?, 12 Pt?, 13 Predynastic
 14 Rome, 15 アッシリア: 前9・8世紀, 16 アッシリア: 前7世紀, 17 アッシリアレリーフに描かれる外国人のサンダル模式
 (OK = 古王国時代, MK = 中王国時代, NK = 新王国時代, LP = 末期王朝時代, Pt = プトレマイオス朝)

装飾に関しては、新王国時代に赤や緑の彩色皮革の使用が始まり、アップリケやパッチワークで飾られた華やかなサンダルが多く見られる。また、ローマ期には革の表面に線刻や丸い刻印を施し、横緒に細い革編みヒモを用いるなど、装飾的要素が復活する。一方で、アコリス遺跡出土の末期王朝時代のサンダルには装飾的要素がほとんど見られず、植物タンニン鞣し革を用いた、実用的な印象を強く受ける。

技術面に関してだが、中王国時代までは単層ソールであり、新王国時代以降は複数革を縫合したソールとなっている。さらに、末期王朝時代にはソール中央部も皮革ヒモや獣糸で縫合を行っている。複数層の場合、間に挟まれた皮革を小さく目に裁断し、縫合個所である周縁部の厚みをなくし、さらに周縁部の縫合個所に帯革を付けるなどの工夫が見られる。

以上述べてきた一連の変遷から画期を求めるとすれば、新王国時代とローマ期がそれぞれにあたる。すなわち、新王国時代には、C3型に代表されるようにサンダル先端の形状が大きく変化する。また、彩色皮革を頻用し、複数層のソールを用いるなど、装飾的、技術的にも前代までとは大きく異なる。さらに、アングルブーツ状のクツやスリッパが登場するのもこの時代である。他方、ローマ期においては、先王朝時代からの伝統であった耳付きサンダルが姿を消す。そして、横緒をソールに直接縫いつけた形状が出現し、また、装飾面においても線刻や丸い刻印などの新しい文様が登場する。

おわりに

本稿では図像資料や他素材の履物を取り上げながら型式学的変遷を追い、編年試案を提示した。画期として位置づけた新王国時代は、アマルナ文書 (Amarna Letters) から知られるように諸外国との交流がとりわけ活発であった。ソールの先端が尖ったサンダルやクツなど新しい形状が登場するのは、その影響であろう。また、ローマ期においては、ローマ本国の生活様式を多く取り入れた植民都市が各地に作られ、'crepidae' や 'caligae' といったネット状サンダルが持ち込まれている。

ところが、ローマ期以前、外国人支配王朝がたびたび興隆する末期王朝時代や、ギリシア人支配のプトレマイオス朝期においては、外国勢力との活発な交流が認められるにもかかわらず、王朝時代の履物の基本的な形状に大きな変更は見られないのである。

すなわち、末期王朝時代にアッシリアがエジプトに侵攻してきたが、そのアッシリアでは、王、神々、兵士に至る多くの人物がエジプトとは異なったサンダルを履いていたことが、前9・8世紀の図像資料から見てとれる。それは足の側面から踵にかけてカバーが付く形状であるが (図6-

15)、遅くともセンナケリブ王 (Sennacherib; 前705-681年) 治世以降は、サンダルではなく、脛脛まで高さがある編み上げのブーツが取って代わる (図6-16)。このようなブーツはエジプトでは見られないものである。また、アッシリア人の履物はソールの先端が尖り、反り返った外国人のクツとは明確に区別して描かれている (図6-17)。

従来、古代エジプト人は裸足で生活し、サンダルは王や高官などの富裕な支配階級に限られた製品であり、墓の副葬品として出土するように、その用途も象徴的、儀礼的な意味合いが強かったとされてきた。また、数多くの図像資料が示しているように、どの時代においても農耕や漁労、製品製作などの「日常生活」場面では、一般民衆は裸足で描かれている。しかし、アコリス遺跡出土の製品を検討した結果、末期王朝時代の古代エジプト社会では、一般民衆が皮革製サンダルを手にすることができたと思われる。毎日の生活の中で恒常的に使用していない、という意味では厳密な意味での「日用品」ではないが、支配階級の人々が儀礼的に用いることに比するのであれば「日用品」として位置づけて良いのではないか。例えば、一般民衆が遠方の神殿へ参詣する際などの「ハレ」の場面や、長距離の商用旅行で使う、いわば「一張羅」のように扱っていたと考えることはできないだろうか。

これまで墓や神殿に描かれた図像資料を用いて、つまり支配階級や富裕層の生活を基準として、古代エジプトの社会や生活の復元が行われてきた。しかし、国家としての対外的な力を失っていた末期王朝時代の、さらに一般民衆の生活を、上記のような図像資料からだけでは復元することはできないだろう。その意味で、アコリス遺跡における末期王朝時代、プトレマイオス朝期の都市や宗教の変容に視点を置いた研究で、国家レベルでの社会変化と地方や民衆レベルでの変化は必ずしも一致せず、都市社会は独自の盛衰があったことが論じられている点は示唆的である (川西2003; 辻村2003; 山花2003)。末期王朝時代には、各地の動物信仰の聖地が一般民衆の尊崇を集め、このように伝統への回帰の色合いが強くなったことが知られている。そして、護符類もまた大衆化した形跡を留めている点を考え合わせるならば、履物において、外国の影響が及ばなかったのは、このような大衆化の動きとは無関係ではないだろう。

本稿は、日本西アジア考古学会第9回大会 (於：国士舘大学) での研究発表「アコリス遺跡検出の皮革工房址と皮革製品」で触れた、アコリス遺跡出土の皮革製履物を中心に上げたものである。本稿を草するにあたり、アコリス遺跡調査隊、古代オリエント博物館の先生方には、数多くの有益なご教示を頂き、深く感謝している。なお、本稿は平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) の交付を受けての成果の一部である。

註

- 1) 先王朝時代 (Predynastic Period) は紀元前 5500 年頃から前 3100 年頃まで、王朝時代 (Dynastic Period) は前 3100 年頃に始まった第 1 王朝から、前 332 年のプトレマイオス朝期 (Ptolemaic Period : 前 332-30 年) の開始までを指す。古代エジプトの時代区分や実年代、名称は諸説あるが、本稿では基本的に Shaw, I. & P. Nicholson 1995 の編年表に従う。
- 2) 古代エジプトの皮革利用は旧石器時代に遡ると思われるが、出土遺物として確認できるのは先王朝時代以降である。この時期には日常の実用品としての衣服や容器などが墓から出土している。王朝時代には短剣の鞘・矢筒・楯などの武具類、護符、容器や袋、履物などが製作され、ロープやヒモとしても頻用された。これらの皮革製品は王や高官など支配階級の墓からの出土が多く、一般民衆が日用品として使用していた皮革製品の例は少ない。
- 3) 製革・鞣製作業とは、「皮を鞣して、革を作る作業」を意味する。「皮 skin」は生皮または被毛の状態のもの、「革 leather」は毛を取り除き、何らかの加工処理が施されたものとする。「皮」と「革」の区別が曖昧なものに関しては「皮革」と総称し、「獣皮」は毛皮・皮・革などすべてを含めたものを指す。また、加工処理として、化学的処理と言える「脱毛」と「軟化剤処理」および「鞣し」、物理的効果のある「張り乾燥」と「揉み」が挙げられる。加工処理の総称と言えるのが「鞣し」である。単純な加工処理を含めた鞣し方法は約 150 種にのぼるとされるが、発展段階に従って、動物油脂鞣し、燻煙鞣し、植物油鞣し、植物タンニン鞣し、明礬鞣しの 5 種類に大別できる (出口 2001: 139)。古代エジプトの初期の鞣し方法は、燻煙鞣しや胡麻油を用いた植物油鞣しなどの簡便な方法であり、植物タンニン鞣しや明礬鞣しはグレコローマン時代まで行われていなかったとされる (Driell-Murray 2000: 302-303)。詳細については拙稿を参照 (花坂 2004)。
- 4) 墓のレリーフや壁画に描かれた皮革製品製作場面や製革・鞣製場面については、拙稿 (花坂 2004: 56-61) でまとめている。
- 5) 履物とは英語の Footwear を意味し、現代では、その形状や用途によってサンダル、クツ、ブーツなどと使い分けられている。これらを厳密に定義することは難しいが、本稿では以下のように定義する。サンダルは基本的には足指を掛ける鼻緒を持つものとするが、ネット状に足甲を覆うもの (strap-work) もサンダルに含める。クツは足甲全体を覆う上部構造 (アッパー) を持つものとし、足甲の先だけを覆い、踵部分がオープンになっている「スリッパ」や、アッパー部分が低い「スリッポン」、足首の高さまで覆われている「アングルブーツ」なども本稿ではクツに含めて論を進めることとする。ブーツは古代エジプトではローマ期に入らないと登場しないが、脛脛までの高さがあるものを指すことにする。
- 6) ロンドン大学内にあるピートリー博物館 (Petrie Museum of Egyptian Archaeology) の所蔵品のオンラインカタログで、製品別、素材別、時代別、所蔵番号などで検索が可能となっている。遺物の説明や検索条件にまだ不備はあるが、所蔵品のすべてをカラー写真で確認することが可能であり、今回は sandal, shoes, leather のキーワードで検索を行った。http://www.petrie.ucl.ac.uk/
- 7) アコリス遺跡で検出された「皮革工房址」に関しては発掘調査概報 *Preliminary Report Akoris 2002, 2003* (Kawanishi and Tsujimura [eds.] 2003, 2004) を参照。また、2003 年度の発掘調査終了時点までの資料に基づき、拙稿 (花坂 2004) で考察を行っている。本稿では、2004 年度の発掘調査での成果を加えた内容となっている。
- 8) P.46.13 住居。中庭を持つ中流階級の住居である。
- 9) 「皮革工房址」の北端は斜面を東西に伸びる日乾レンガ壁に接しており、南端は斜面によって切られていて確認することができない。2004 年度の調査で遺構の西端が確認されたが、東端は未調査区域の埋土下に続いている。
- 10) 製品製作工房であった場合、ナイフや縫い針などの工具が出土していないのが気になる点である。一方、製革工房であった場合、植物タンニンを抽出するためにアカシア属の莢や種子を煮炊きする必要があり、また、皮革を浸漬するためにも大甕や水槽が必要になってくるが、そうした大甕などは出土していない、といった問題点が残っている。
- 11) 2002 年度から行われている発掘調査で出土した遺物は、表層からコプト時代の遺物が一部出土しているが、埋土中の遺物の大半は第 3 中間期と末期王朝時代に属するものであり、アコリス遺跡の他の調査地点で出土しているプトレマイオス朝期、ローマ期の遺物は含まれていない。
- 12) タイプ A をヴァリエーション 1、2 としており、1 が王朝時代に典型的な「耳」を持つサンダルである。2 に分類された 3 点の遺物に関して、出土地や年代は不明となっているが、コプト時代のものと類推されている。また、大英博物館所蔵の Qasr Ibrim 出土のサンダル (EA71904) は、タイプ A ヴァリエーション 2 に比定できるが、これは紀元後 8~9 世紀のものと解説がついている。
- 13) 王朝時代には「王のサンダルを預かる者」という称号があり、「王の土地を預かり、管理する」権利を持っていることを示している。また、「(王・神) のサンダルの下に」という定形文もしばしば使い、サンダルが土地や領土を表す象徴的な意味として使われていた。さらに、来世でも領土を治めることを願う墓主とともに副葬し、戦勝祈願・御礼として神殿に奉納された。第 20 王朝ラムセス 3 世治世には、15000 足以上の植物製 (パピルス) サンダルが神殿に奉納された記録がある (Breasted 2001 vol. 4: § 241)。
- 14) 前 6 世紀のギリシアの壺絵にクツ製作工房が描かれており、1 人の客が原料革の置かれた台の上に立ち、職人が半月形のナイフを使って、客の足のサイズに合わせたソールを切り出そうとしているものがある。
- 15) ヒエラコンポリス出土。カイロ博物館所蔵。高さ 64cm、幅 42cm の片岩製。赤冠、白冠という上下エジプトそれぞれの冠を被り、パレット上部にはセレク (王名柱) が彫られ、南北エジプトの統一を表したものと考えられている。また、人物の 2 次元的な描写方法や地面を表す線など、後のエジプト美術の表現方法が随所に見られる (Malek 2003: 30-31; 近藤 1997: 49-51; 高宮 2003: 247-248)。
- 16) UC7497 には枝番号が付けられており、確認できたのは i~vii までのうちの 4 点である (vii 以降の枝番号があるかは不明)。UC7498 もカフン遺跡出土の中王国時代のサンダルとされているが、側縁部やソール中央に縫製痕とヒモが残っており、他の中王国時代のサンダルと様相を異にしており、新王国時代からプトレマイオス朝期までのサンダルのように筆者には思われる。
- 17) 'Send an oxhide or a goatskin! You shall give it, but only to the sandal-maker Werniptah. And record it in writing that an oxhide has been given to this sandal-maker.' Berlin Papyrus 10050, 1-5. (Wente 1990: 73-74)
- 18) 生皮に近いと透明感のある黄褐色となるが、出土しているサンダルは保存のための薬品処理が行われているためもあり、黒褐

色または濃茶褐色をしている。植物タンニンで鞣された皮革の色調は茶褐色となるのが特徴的である。

- 19) カイロ博物館に所蔵されているが、ほとんどが植物製の儀礼用サンダルである。
- 20) カイロ博物館所蔵 No.9-1-26-3; 大英博物館 BM EA4408/09 (Driel-Murray 2000: Fig.12-13); ルーブル美術館 E14502
- 21) 両者とも1枚革をネット状にカットして作られたサンダル(クツ)であるが、後者には滑り止めの鋸が打ってある。ローマ軍の遠征とともに各地に広まっている。crepidaeは後述するギリシアの'krepides'に語源を持つと思われる(Goldman 2001)。
- 22) krepidesの他に trochades, enneysklos, heptysklosなど、踵部分の当て革の有無や、ネットのヒモの数の違いなどによって、いくつかのヴァリエーションがある(Morrow 1985)

図版出典

図1; Davies 1973 pl. LII, LIII 筆者改 図2~5; 筆者作成
 図6; 1. サッカラ、第6王朝私人墓レリーフより筆者作成 2. ルクソール、カルナック神殿ラムセス2世レリーフより筆者作成 3. デル・エル・バハリ、第26王朝私人墓レリーフより筆者作成 4. BM EA41674, Driel-Murray 2000 Fig. 12-10 5. Ashmolean Museum, Driel-Murray 2000 Fig. 12-11c 6. BM EA36200, Driel-Murray 2000 Fig. 12-3 7. UC28350, Driel-Murray 2000 Fig. 12-11d 8. 筆者作成 9. Louvre E 12563, Montebault 2000 Numéro60 筆者改 10. Louvre E12361, Montebault 2000 Numéro38 筆者改 11. Louvre E11879b, Montebault 2000 Numéro50 筆者改 12. BM EA4402/3, Driel-Murray 2000 Fig. 12-14 13. Turin, Museo Egizio, Driel-Murray 2000 Fig. 12-10 14. Metropolitan Museum of Art, NY inv.25.78.43, Goldman 2001 Fig. 6~18 筆者改 15~17. 大英博物館レリーフより筆者作成

参考・引用文献

- Bard, K. A. 1999 *Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt*. New York, Routledge.
- Bravo, G. A. and J. Trupke 1970 *100000 Jahre Leder*. Basel und Stuttgart, Birkhauser Verlag.
- Breasted, J. H. 2001 (pb ed.1906) *Ancient Records of Egypt* vol.1-5. Illinois, University of Illinois.
- Brier, B. and H. Hobbs 1999 *Daily Life of the Ancient Egyptians*. London, Greenwood Press.
- Casson, L. 2001 (rev. ed. 1975) *Everyday Life in Ancient Egypt*. Baltimore, The Johns Hopkins University Press. [Originally published as *The Horizon Book of Daily Life in Ancient Egypt*.]
- Davies, N. de G. 1973 (rev. ed. 1944) *The Tomb of Rekh-Mi-Re at Thebes*. New York, Arno Press.
- Driel-Murray, C. van 2000 Leatherwork and skin products. In P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.) *Ancient Egyptian Materials and Technology*, 299-319. Cambridge, Cambridge University Press.
- Erman, A. 1971 (1894) *Life in Ancient Egypt*. New York, Dover Publications, Inc.
- Forbes, R. J. 1966 (2nd ed. 1956) *Studies in Ancient Technology*, vol.V. Leiden, E. J. Brill.
- Goldman, N. 2001 Roman Footwear. In Sebesta, J. L. & L. Bonfante (eds.) *The World of Roman Costume*, 101-129. Wisconsin, The University of Wisconsin Press.
- Kanawati, N. and A. McFarlane 1993 *Deshasha-The tomb of Inti, Shedu and Others-*. Sydney, The Australian Centre for Egyptology.
- Kawanishi, H. and S. Tsujimura (eds.) 2003 *Preliminary Report Akoris*

2002. Tsukuba, University of Tsukuba.
- Kawanishi, H. and S. Tsujimura (eds.) 2004 *Preliminary Report Akoris* 2003. Tsukuba, University of Tsukuba.
- Hayes, W. C. 1990 (rev. ed.) *The Scepter of Egypt -A Background for the Study of the Egyptian Antiquities in The Metropolitan Museum of Art- Part I*. New York, Abrams, INC.
- Hodges, H. 1970 *Technology in the Ancient World*. New York, Alfred A. Knopf, INC.
- Lepsius, C. R. 1848 *Denkmäer aus Aegypten und Aethiopien*, Band III. Berlin, Nicolaische Buchhandlung.
- Lucas, A. 1999 (4thed. rev. by Harris, J. R. 1962) *Ancient Egyptian Materials and Industries*. New York, Dover Publications, INC.
- Malek, J. 2003 *Egypt-4000 years of art-*. New York, Phaidon Press.
- Montebault, V. 2000 *Musée du Louvre Département des Antiquités Égyptiennes Catalogue des Chaussures de L'Antiquité Égyptienne*. Paris, Réunion des Musées Nationaux.
- Montet, P. 1981 *Everyday Life in Egypt in the Days of Ramesses the Great*. Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press. (translation from *La Vie quotidienne en Égypte au temps des Ramesès*, 1958)
- Morrow, K. D. 1985 *Greek Footwear and the Dating of Sculpture*. Wisconsin, The University of Wisconsin.
- Newberry, P. E. 1893 *Beni Hasan*, part I. London, The Egypt Exploration Fund.
- Newberry, P. E. 1894 *Beni Hasan*, part II. London, The Egypt Exploration Fund.
- Partridge, R. 1996 *Transport in Ancient Egypt*. London, The Rubicon Press.
- Peet, T. E. and C. L. Woolley 1923 *The City of Akhenaten Part I : Excavation of 1921 and 1922 at El'Amarnah*. London, The Egypt Exploration Society.
- Petrie, W. M. F. 1898 *Deshasheh*. London, The Egypt Exploration Fund.
- Quirke, S. 2004 *Titles and bureaux of Egypt 1850-1700 BC*. London, Golden House Publications.
- Reed, R. 1972 *Ancient Skins Parchments and Leathers*. London and New York, Seminar Press.
- Schiapparelli, E. 1921 La missione Italiana a Ghebelein. *ASAE* 21: 126-128.
- Shaw, I. 2001 Egyptians, Hyksos and military hardware: causes, effects of catalysts?. In A. J. Shortland (ed.) *The Social Context of Technological Change -Egypt and the Near East, 1650-1550 BC*. Oxford, Oxbow Books.
- Stocks, D. A. 2001 Leather. In D. B. Redford (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Vol. II, 282-284. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Strouhal, E. 1997 *Life of the Ancient Egyptians*. Liverpool, Liverpool University Press.
- The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee 1995 *AKORIS-Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo.
- Waterer, J. W. 1956 Leather. In C. Singer et al (eds.), *A History of Technology*. vol. II, 147-190, London, Oxford University Press.
- Waterer, J. W. 1976 Leatherwork. In D. Storong and D. Brown (eds.) *Roman Crafts*, 179-193, London, Duckworth.
- Wente, E. F. 1990 *Letters from Ancient Egypt*. In B. O. Long (ed.) *Society of Biblical Literature Writings from Ancient World*. Vol.1. Atlanta, Scholars Press.
- 伊藤貞夫 1981『古典期のポリス社会』岩波書店 東京。
- 川西宏幸 2003『古代都市アコリスの軌跡』屋形禎亮編『古代エジ

- プトの歴史と社会』 299-315 頁 同成社 東京。
- 近藤二郎 1997『エジプトの考古学』世界の考古学④ 同成社 東京。
- 高宮いづみ 2003『エジプト文明の誕生』世界の考古学④ 同成社 東京。
- 辻村純代 2003「末期王朝時代における宗教の変容－プトレマイオス朝時代のテラコッタ淵源を求めて－」屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』 337-354 頁 同成社 東京。
- 出口公長 1985「製革技術の形態から見た姫路白鞣革」松岡秀夫傘寿記念論文集『兵庫史の研究』 621-642 頁。
- 出口公長 1990「姫路革－その伝統と技術」兵庫県立歴史博物館企画展資料集『ひめかわの伝統美～意匠と技法～』 15-38 頁。
- 出口公長 1999『皮革あ・ら・か・る・と』解放出版社 東京。
- 出口公長 2000a『印伝革の技術史的考察と製造技術に関する研究』昭和女子大学学術博士号論文（未刊行論文）。
- 出口公長 2001「伝承皮革の鞣し技術」『皮革科学』vol.47, No.3 139-148 頁。
- 花坂哲 2004「古代エジプトの皮革技術－アコリス遺跡検出の「皮革工房址」をめぐって－」『筑波大学先史学・考古学研究』第15号 53-77 頁 茨城 筑波大学。
- 山花京子 2003「古代エジプトにおけるヘレニズムの神々の受容について－中部エジプトのアコリス遺跡を例に－」『文明』第3号 67-76 頁 東海大学文明研究所。

花坂 哲

筑波大学大学院生

日本学術振興会特別研究員

Tetsu HANASAKA

University of Tsukuba

The Japan Society for the Promotion of Science